

福田神社と吉森堂の2箇所では、真庭で夏に開催されるお盆のお祭りの一部である、伝統的な踊り、大宮踊りが行われる。この踊りは、7月と8月の何日にもわたり、いくつもの場所で催されるが、福田神社と吉森堂は、特に由緒ある場所だ。

福田神社では、毎年8月15日に大宮踊りのフィナーレを迎える。地元の人々は、この神社を大宮様と呼ぶ。これが、踊りの名前の由縁である。この神社の正確な建立時期は不明だが、その歴史は少なくとも13世紀（複数の歴史上の記述において、そう記載されている）まで遡ることができる。本殿や、それに繋がる参拝スペースの、現在の木造の建築物は、1916年のものである。福田神社には3つの神が祭られている。嵐の神、素盞鳴尊と、米の女神、稲田姫命、そして、縁結び国造りの神であり別名大国主とも呼ばれる、大己貴命である。

福田神社の本殿内の、大宮踊りが催される参拝エリアは、年季が入り緑に着色した銅の屋根で覆われているが、壁は、そよ風が入るように開放されている。観客は、踊り手が狐の動きを模した細やかなステップやジェスチャーを見せながら擦り切れた木の床でゆっくり円を描く様子を、3方向から見守る。踊り場の周囲を見上げると、複数の大絵馬（木に描かれた願掛けの大きな絵）がまとめて掛けられている。何世紀にもわたり、ご利益を受け、大願成就を祝うために奉納された大絵馬には、日本の歴史で縁起が良いとされる象徴的な事物や光景が描かれている。今日、これらの大絵馬は、現代の踊り手と、先祖の暮らしや文化的伝統とを繋ぐ役目を果たしている。

敷地にある2本の大きなイチョウの木は、樹齢およそ650年と考えられている。これらのイチョウは神聖なものと考えられているため、秋に美しい山吹色に変色するイチョウの葉は、かき集めず、地面に敷き詰めたままにしておく。朝早い時間帯に訪れれば、とりわけ見事な光景を見ることができる。新たに落ちた葉が、通行する参拝者にかき乱されていない状態で残り、苔で覆われた石灯笼や、狛犬（ライオンのような番犬）の風化した像の周りに吹きだまりとなっているためだ。

大宮踊りが行われるもう一つの由緒ある会場、吉森堂は、岡山県最古の墓地の一つに隣接する、壁が開放された木造の質素な建物である。この場所で催される踊りは、ここに埋葬された人知らぬ侍の魂をたたえたものである。花こう岩でできた2つの大きな塔は、主墓を表している。今となってはその碑文を読むことは容易ではない。しかし、様式からすると、1300年頃のものである。塔の回りには、およそ400年前に作られた、小さな墓碑が密集している。これらはより新しい時代のものだが、耐久性の低い石でできているので、損傷が激しい。過去には、吉森堂と墓の周囲には稲田のみが存在したが、現在、この由緒ある文化的遺産の周りには、現代的な倉庫や家屋が立ち並ぶ。現代日本の特徴である、古と新の融合である。

吉森堂には、400年来の木の阿弥陀仏像が置かれ、一般客向けに一年中開放されている。阿弥陀は、すべての衆生を死後、浄土（悟りが保証される極楽）に導き救済することを誓った、救済

者である。彼は、日本の仏教で最も広く信仰されている教え、浄土仏教における、中心的な神物である。